

発展途上国の人びとと道を直す

木村亮
KIMURA Mokoto 正会員 京都大学産官学連携センター教授



写真1 1952(昭和27)年十津川村での道普請
(出典:新井宗幸監修、目で見る五條・吉野の100年、郷土出版社、p.99、2006)

世界の貧しい人びとの暮らしを豊かにするために「自分たちの道は自分たちで直せる」という意識を広げることが、私の夢である。開発援助を待つのではなく、自らで道をつくり維持管理していく。日本でも昔は「道普請」の精神で、写真1のように住民が協力し合って道路を改修し、社会基盤を維持管理していた。「普請」とは、もともとは禅寺で大衆を集めることを意味する。普く大衆に請うて、堂塔の建築などの労役に従事してもらうのである。

住民が自ら道を直すためには、簡単な方法が必要である。現地の材料を用い、人力施工が主体の道路整備手法の開発が不可欠である。そこで「土のう」を路盤材料に用いた道路整備手法を開発し、土木学会誌(2006年9月号、33ページ)に紹介した。現在までに世界中の

道路を2.5km補修し、みんなに「ありがとう」と感謝された。

まず、道直しによって村人たちの意識が変化した、ケニア西部の村での例を紹介する。写真2の水路の近くで土のうで道を直した。3日間の道直しが終わわり、その後の維持管理の重要性を説いたとき、村のリーダーが写真の橋も直してほしいと言った。しかし十分な時間と資金がなく、橋までは今回は直せないと行って村を去った。

2週間後、村人たちは国有林の伐採許可を取り、22本の木材を現地まで運び、現場付近の土を土のう袋に入れ木の上に並べ、袋が破れないように表面を砂礫で覆い、車が通れる立派



写真2 壊れかけの橋(ケニア西部)



写真3 みんなで直した橋の上で(右端が筆者)

な橋をつくった。「橋普請」の精神でほとんど費用はかけていない。私は4ヶ月後に現地を訪れた(写真3)が、胸を張りいかに橋をつくったかを説明する村人の前向きな態度を見て、涙が出そうになった。土のうによる道路整備をきっかけとして、住民がやる気と自信をもち、橋の老朽化という問題に対して共同で問題解決にあたった。これぞ私の望む発展途上国の簡便社会

基盤の形である。

十分便益を検討された大規模な社会基盤整備は、発展途上国には必要不可欠である。舗装道路が伸びれば、道路に沿って電線が立ち、村ができ、人が道を使い移動する。幹線道路の重要性を何度も再認識した。ただ人びとは幹線道路まで未舗装の道を使って来る。世界の人が自分が自分の道だという意識で未舗装道路を補修し維持管理すれば、少しは世のなかが変わると私は思っている。

今まで四つの国で四つの違うアプローチで道を直しを仕掛けている。一番初めのパプアニューギニアは完全なボランティアベースだが、地域



写真4 学生たちが歩道をつくる(フィリピン北部)

の国会議員を巻き込んでいます。二番目のフィリピンは、大学連携という形で大学教員をコーディネーターにし、学内のインフラ整備を行っている。三番目のケニアでは、長年の経験と人脈を生かし、農業省を母体としたJICAプロジェクトで活動を展開している。最後は昨年8月から仕掛けている、ウガンダでの海外青年協力隊の現地研修を中心とした活動である。文系出身の村落開発隊員として村の社会基盤整備を求められても、目的意識が高いけれど方法を知らない隊員に対して、土のう利用の研修を行った。その何人かは任地に戻り、いままも村人とともに活動を進めている。

ここではフィリピンの例を紹介する。ある大学では構内の講義室から図書館までの近道がなかった。乾季は畑の中を歩けるが、雨季は大きく遠回りをしなければならない。大学と話し合い、新入生がボランティア活動をする必修の授業を使って、学生たちに写真4のような高さ1m、長さ60mの歩道(盛土)をつくってもらった。写真5は表面に草が生えた雨季の歩道で、洒落たタイヤなどを置いている。実は私は学生のためだけに道をつくったのではない。フィリピンは現地NGOの活動が活発で、大学と連携している。一方、現地の農民は乾季のため、小規模の灌漑ダムを必要としているものの、NGOはそのつくり方を知らない。狙いはこの盛土を雨季に見て、小規模なダムに応用してみようという気にさせることなのである。高さ1mの乾季だけ水を溜めるダムであ



写真5 雨季でも立派に使える土のうの歩道

る。住民の要求性能を満たすことのできる、簡便な社会基盤である。

写真1をよく見ると、口に手をやったり何かを握っている。仕事が終わったらお昼とき、おにぎりをもたって食べていたのである。ボランティアでの道直し、労働に対して一切お金は出さないとこの考え方はきれいなことである。「普請」でつくった簡便社会基盤のうえで、私も笑顔で住民たちと一緒に夢を語り、何かをほお張っていたい。日本人の誇りをもって、現地で要求される社会基盤整備にかかわりたいものである。「ペシャワールの会」の中村哲先生¹⁾のアフガンスタンでの水路づくりの活動をご存知でしょうか。土木技術者としてまったく頭が下がる。

参考文献

1) 医者、用水路を拓く、石風社、2007